

先生、ピンイン出ますか？ －新補助教材の提案－

武信 彰

Will PINYIN be on the test?!! : A draft proposal for a supplement teaching aid

TAKENOBU Akira

学生に試験期总会問老師這次考試考不考拼音字母。有的同学說“老師，考拼音嗎？”也有的同学說“考發音吧？”其實不然。考的是讀音。我們應該認識到只有把握住漢字讀音才能學好漢語。

然而另一方面，當今同學們一般只是有時查一下智能手機所具備的“詞典”而已，沒有擺出準備把握漢字讀音的姿態。

本文作為一只抗道的金絲雀提醒把漢語教給日語母語者的人認識到學生們掌握不了漢字讀音的情況日益增多，而且想提議我們需要有危機感地採取對策應對這個緊急情況。

0. はじめに

中國語の入門・初級レベルの試験と言えば、たいていは“**拼音字母**”が顔を出すことになろう。そして、受験対象の学習者においては、この文字¹に対し強い関心を示す者が多い。「先生、ピンイン出ますか？」という声がかかることがしばしばである。この問かけは過去も今も変わらない。しかしながら、もはや以前のように適当にあしらってすませるわけにはいかない、深刻な事態に陥っているのではなからうか。解答がそう示唆している。

原因もIT化を始めとする時代の趨勢の中に見て取ることができそうである。

1 方便からなのか“**拼音字母**”を「発音記号」と呼んで済ませる教師もいるようである。

しかし、だからと言ってそれ自体に抗して旧に復するような指導へ強制的に戻ることは不可能である。

坑道のカナリアの杞憂であるならばよいけれども、さもないならばカナリアの力をもってできるだけ教授側の工夫を考えてみた。なによりも、履修者は現に学習中であり、すぐに次の履修者を迎えるのであるから。

1. 愕然とする不都合な真実

ピンインの絡む設問が試験問題の一角を占めてこそ入門・初級用の試験であるし、それが全体の中で難易度が突出しているということにはならない。

そうであったはずなのだけれども、他の形式の設問に比して極端な出来の悪さを示す例も少なくないようになってきた。それだけならばさほどの危機感を抱くには及ばないのかもしれないけれども、ピンインを誤るのではなく中国語にはない音節を綴ったりするのに至ってはその限りではない。無気・有気やn・ngの区別あるいは声調などを問うつもりが、成績不良者でもないのに音節そのものがまったくと言ってよいほど捉えられていない。音節の内在化が著しく遅れていることに愕然としてしまう。

最初の発音練習を終え語彙を覚える段階で徐々に身についていくものだと、これまでは特別に気を配ることなく次の段階に進んでいたものが、最近ではこの間の定着が著しく弱く、結果ピンインをもって解答する試験問題に愕然とするほどの誤答が現れるようになった。

定点観察である。大きく能力差のある対象ではないところに、質的に截然とした違いが起こっているわけだから、教場の嘆息で済ませられる問題ではない。

2. ピンインの問題でも発音の問題でもない、読音の問題である

「先生、ピンイン出ますか？」に答えて「ピンインは出ますが、ピンインの問題ではありません。」と言えば、「発音の問題！」と声上がり、「いいえ、発音の問題の問題でもありません。」と畳みかければ、釈然としないといった反応が示される。

ピンインを使って問う設問に過ぎず、けっして“拼音字母”について問うものではないし、発音を検査するのならば、なにもピンインを使ってペーパー試験を課すことはない。

入門・初級用教科書は通常400余り²の音節を開口呼・齊歯呼・合口呼・撮口呼の四呼に従って、もしくは“**拼音字母**”に合わせてそれを崩して一覧表にしたものを付録としている。これを順番に読み上げて発音練習を行うという方法もあるが、学習者にとって、この単調な訓練は目的を見出せず忍耐力が求められる。

履修者が「ピンイン」に過敏に反応する背景には、“**拼音字母**”の習得と発音練習が併行することに伴ってある種の苦手が醸成されてしまうことがある。しかも、“**拼音字母**”自体があまりよい出来ではない。二重規範により音韻に依ったり依らなかったりで、とりわけ韻母は継ぎ接ぎの感を免れないほどである。

このように履修者側が設問の趣旨を理解していないのは残念ではあるけれども仕方がない。しかし、教授者側までそうであってはなるまい。ピンインの問題でも発音の問題でもない、読音の問題であることを見失わずに出題し評価する必要がある。

3. 「ピンイン=発音」という誤解

上述のように入門期に“**拼音字母**”を学びながら発音練習をするというピンインと発音両者を併行して学ぶ段階が続き、一方で中国語の実際の書記が漢字によるものであるということは学習の次の段階を待つまでもなく常識的な知識で認識できているので、自ずと「ピンイン=発音」という誤解に誘われるのは避けがたいようである。個々の学習者においてはそういう推察が成り立とう。

教授者側も必ずしも堅固ではない。教授者が中国語や中国語教育を専門とするしなにかかわらず、ミスリードされ得るもっと大きな流れの中であって、さすがに「ピンイン=発音」といったストレートな図式ではないとしても、できるだけ漢字を離れて教授することが求められているのではなかろうかという強迫観念から自由であるとも言いきれない。

2 通常411であるとされるが、教科書によって多少の異同が見受けられる。

4. 音声言語中心主義の系譜

4.1 中国における文字改革と漢字離れ

倉石武四郎（1952）は、中国の文字改革の進展を詳細に振り返り、時代の機運もあって将来的には博物館で保存されるのが漢字の運命であるという発言を紹介してこれに賛同し、後に倉石武四郎（1958）や倉石武四郎（1969）等の教科書や倉石武四郎（1963）という辞典などのかたちで漢字に頼らない中国語教育の実践に道を開いている。

中国における文字改革との具体的な関連は見出せないけれども、文字の誕生前に言葉は音声として存在しており、字形が異なっても字音が同じであれば意味の関連性があると考える藤堂明保の「単語家族」という概念³もやはり同じく当時の機運のうちに生まれたものである。

いわゆる第二外国語で独仏語に加わる形で席を得た後発の外国語科目である中国語が、気づかぬままに音声言語中心主義のバイアスに覆われ、その中で拡大継続してきた。こういう風に捉えれば、いまだその残映の中にあるのかもしれない。希薄であるがゆえに説くことの難しいバイアスではある。

4.2 日本語母語話者相手に漢字を隠しての教学は得策とは言えない

欧米の中国語学習書に漢字を外してピンインのみで入門させる方式で編まれているものはある。⁴しかしながら、日本語母語話者にこの方式で教授を試みるのはずいぶんと事情が違ってこよう。

漢字を隠して「ローマ字中国語」であると言ってみても、そのからくりが気づかせないのは無理であるし、せっかく隠したはずの漢字であるのに彼らがそれを補おうという気を起こすのを止められないという矛盾を抱えている。

もし中国語の話し手が漢字の世界で生活していることに思いが至らないとなれば、世間の事情に疎いというよりも学習に臨んでレディネスを欠いていると推定されよう。あえて「漢字隠し」に乗っかって教えを受ければ受けたでそれはあまりに不自然であろう。

3 藤堂明保（1965）。

4 例えば、T'ung, Ping-cheng and Baker, Hugh D.R.（1993）などのように漢字を一切交えないで編まれるものもある。

いずれにせよ、中国語を母語とする非識字者にラテン化新文字で読み書きを身につけてもらおうとした往時の熱意を日本語母語話者に移して伝えるのは困難である。

5. 親文字方式

5.1 ローマ字順の配列は親文字方式の放棄

「ピンイン＝発音」という短絡については、欧米の言語で「アルファベットによるスペリング＝発音」だと言い張る人はいないわけであるから、この誤謬を解消するのはそう難しいことではない。しかしながら、漢字を裏に回して見えないようにするという事は、単にローマ字化、すなわち“**拼音字母**”を表に出すというだけのことではない。例えば、倉石武四郎（1963）においては見出し字が消え、見出し字に統一されない雑多な見出し語がローマ字順の配列で並ぶようになってしまっているのである。電子辞書からネット環境での検索においてはむしろ一般的に見えるけれども、それはとりもなおさず中国語の語構成を反映した親文字方式を放棄したということである。武信彰（2011）の危惧した、もはやそれすら過去のこととなりつつある電子辞書の使用によって失われた親文字方式を先行放棄しているのである。

もっとも、親字を立ててその下に熟語を配列する従来からの方式にも大きな弱点がある。親字が先頭字になるもののみに限られるという点である。

上野恵司・相原茂(1993)のように逆引きと銘打つ辞典もあれば、尚永清(1992)のように一般的な辞典であるにもかかわらず親字に補足して他配列の熟語が羅列されているものもある。しかしながら、3文字以上から成る熟語や成語も含めて整然と並べて示す**傅兴岭・陈章焕**（1982）のようなものもすでに編まれており、この字典に依ればかかる弱点を改善する具体的方途が開かれよう。

もちろん、辞典は検索するためのものであるからには、伝統的な方式が相応しいのであって換える必要はないかもしれない。しかしながら、学習という観点に立てば、弱点であり工夫の余地があるのも確かである。

5.2 なぜ親文字方式なのか

親字を立ててこれを先頭に持つ熟語を並べて示すという方式を捨てる方が、古い時代遅れの癖を廃して他の外国語のような、言い換えれば「普通の外国語」

の学習に相応しい辞典である。音声言語中心主義であると意識しなくとも、「普通の外国語」に押し上げる感覚が働いたのかもしれない。

確かに、中国語教学には英語などの欧米のいわゆる「普通の外国語」を学習した者にとって、かつての唐通事の経験的教學法なのかと思わせるような指導も珍しくない。

400余りの音節が整理された音節表が教科書に収められ、時に読み上げて発音練習が行われたりもする。これもなにか念仏のようなものを連想させ、中には違和感を抱く学習者も出かねない。

しかし、単調に読み上げることの是非は別として、漢字の読みはこの400余りの音節のいずれかであり、これを身につけることの意義はきわめて大きい。そして、日本語の話し手として感覚的に知っている通り、それぞれの漢字には一定の意味が含まれる。

親文字方式の構えで語彙を「入力／出力」していくことは、「音節の把握」に努めつつ「発音練習」しながら「漢字の読み」を積み上げていくことと同じレール上にある。もし切り離すならば、この連関が途切れ学習効果が著しく落ちるであろうことは容易に察せられる。具体的な指導方法は適切に選ばれるべきであろうけれども、音節表に目を遣り中国語という言語の特徴を測り、音節を意識し、憶えていくことは、学習上の必須過程であると言えよう。

さらに、これらの組み合わせで語彙や語句ができる。二音節語の2音節は数多ある漢字の中のいずれかであり、当該の形態素を代表する。数多あるとはいえ、常用字が占める割合が大きく、言わば語構成がsee-through（シースルー）で顕在なのである。このメカニズムが身をもって分かってくれば、どれだけ楽しい学びになるか想像に難くない。この学習上の利点をみすみす捨てるだけの他のより効果的な方法があるのかと問えば、いわゆる臨界期を迎える前に中国語環境で育つとか、一般の学習環境の範囲の外にある場合に限られるだろう。

6. 現状での現実的解決策

武信彰（2011）の提案する現実的解決策はたちまちのうちに現実性を失ってしまった。中国語辞典の使用は電子辞書からさらに雪崩を打ってスマートフォンに格下げになり、「紙」の辞典との優劣の議論もはや耳にしない。

技術的には長足の進歩であるし、音声言語中心主義のバイアスもかかっている。一時は論じられた伝統的な「紙」の辞典の内容とそれ以降の機器を通して

アクセスするコンテンツとの質的な相違にはあまりに無頓着になっている感が強い。

親字を立てないので中国語の音節から漢字さらに熟語の構成・連語の組み立てへと視野が広がっていかず、かてて加えて「タップすれば出る、もう一度タップすると消える」の操作は、再認型の記憶は養えても再生型の記憶は鍛えない。

音節全体を視野に入れ、親字から熟語さらに構文へ繋がるような、簡便ながらも記憶のための遊び（ゆとり）をもつ補助教材を、あたかも“万金油”のようにポケットに入れておいて随時使ってもらおう。そういった応急手当てを解決策の一つとして提案したい。

7. 補助教材作成のための基礎教材

7.1 発音字典

漢字の読音を一覧するには発音字典なるものが最も効率がよい。もともと漢字の読音を覚えるために推奨されるものであるから当然のことかもしれない。

日中国交正常化を境に教科書類を始めとする教材の出版が急速に活発となり、また音声教材も豊富になる中、「発音字典」を携行して学習するスタイルがかつてあったという思い出話すら聞かなくなっていった。

とはいえ、例えば中山時子・戸村静子（1982）⁵や遊佐昇（1984）のように「発音字典」は出版されていなくもない。後者は当時の電報作業用に編まれたものであるので措くとして、前者は学習用であるとされ後に新装版も出ている。「発音だけひきたい時、発音字典は便利である」と言われても、その用途だけでは一昔前といえどもその意図に応えかねるものであった。しかし、このあたかも首の皮一枚で現在の中国語学習に繋がる発音字典ではあるけれども、一方でかえってそのプリミティブな点が、他の教材と取り合わせることで「古为今用」され得る可能性を残している。

では、発音字典は読音喪失の危機にある中国語学習者に活かしてもらうためには、いかなる工夫を必要とするのか。中山時子・戸村静子（1982）では同一音節に収まる漢字を《新华字典》の配列に従って列挙している。

（注：中山時子・戸村静子（1982）185-186頁）

5 後に中山時子・戸村静子（2001）が出ている。

TUŌ ㄊㄨㄛˊ t 'o

tuō 托(託) 佻 拖(佻) 脱(脱)

tuó 驮 [duò] 佗 陀 坨 沱 驼 柁 [duò]
 砣 (△砣又 [tā]) 駝 醜 跼 鮑 橐(橐) 鼙(鼙)

tuǒ 妥 庾 橢(橢)

tuò 拓 (△魄又 [pò] 又 [bó]) [tà] 柁(木橐) 躒 蔴(蔴)
 籀(籀) 唾 魄 [pò] [bó]

まず学習者にとって後回しにすべきものは割愛したい。順序も必要度に応じて決めるのが相応しいが、字典ではあるとはいえ、そもそも検索するために引く類のものではない。であるから、āからzuòへアルファベット順に並べること自体が不要であろう。覚えて、身につけてもらうための教材であるならば、またIT機器に依存度が増して再生型から再認型へ大きく傾いた態勢にある学習者にとって、それとは異なるアクセスを通して知的好奇心が刺激され、読音の習得に誘い込まれるような手立てを講ずるのが上策であろうと考える。

7.2 音訓索引の活用

漢字の読音を検索する便利ツールに、日本出版の中日辞典の音訓索引がある。この音訓索引は日本語使用者に対する特別なサービスとして設けられているものであり、非常に簡便でかつ出費を必要としない。

音訓索引はたいいていの中日辞典に備わっていて以下のように音読みでも訓読みでもその中国語音に到達することができる。⁶

ダツ	夺	duó	217
	脱	tuō	793

6 武信彰・山田真一 (2013)。

ぬぐ 脱 tuō 793

ただ、音訓索引を活用するに当たっては、学習者がどれだけ音訓に通じているかという問題が残る。すなわち、中国語からではなく日本語からアクセスする利点がなければ、これを採用する意味がないからである。

漢字に関する検定試験が行われたりテレビのクイズ番組で漢字の問題が出されたりしている。些末的な知識を問うクイズについてならばお遊びとして片づけることができようが、あるレベル以上の母語話者ならば使いこなせるであろうと思われる範囲の知識であるならば、その外に漏れる人たちは、言わば漢字弱者である。

残念ながら、漢字弱者と言ってもよいかもしれないほどに漢字の使用に苦手な人も少なくないし、そうでなくともクイズに出されるような範囲ではお手上げだという人はむしろ一般的である。であるから、例えば「五十音引き」を謳う中国語辞典⁷もあるけれども、これを用いて“贏 yíng”を「エイ」から引くことができるのは「輸贏を争う」といった言葉遣いに慣れ親しんでいるごく一部の人に限られよう。一方，“贏 yíng”は中国語としてはごく基本的な語彙である。五十音引きを謳う中国語辞典と同じであって、必ずしもそのままよしとはできない。

音訓索引を利用するに当たって、音訓の難易度の高いものは調整する必要がある。これに併せて日本語でほとんど使われない漢字も工夫を施して補わねばならない。

8. 音訓索引を活用した場合のシミュレーション—学習の流れと効果

音訓索引から読音を確認する。ちらりと同音字表に目を通す。読音確認字のミニ情報を消化する。ミニ情報には日本漢字との異同・単独で語となるか否か・主たる熟語・破音字の他の読み等々を簡潔に記してある。

気になったら即検索、そうでなくても随時ついに手に取ってめくる、そういった自習方式の発音字典ならぬ読音字典を創れば、基礎力を養う時期での携行によって本稿の危惧する状況からの好転を期待できると信じたい。

7 北浦藤郎・蘇英哲・鄭正浩（1991）。

ダツ →



ぬぐ →

脱 tuō

① (服などを) 脱ぐ. 除去する. ② (髪の毛などが) 抜ける. (皮膚が) むける. ③ (文字を) ぬかす, 書き落とす. ◇◆脱する. 離れる. 逃れる. ㊦㊦離 / 関係を断つ. …から浮き上がる. ㊦㊦摆 / (牽制・束縛や困難などから) 抜け出す, 逃れる.

tuō 脱 托 拖

tuó 驮 驼 駝

tuǒ 妥

tuò 拓

さらには、現代的な欠を補うだけでなく、中国語の音節の全体像を掴みつつ漢字の読音を覚えるその過程で大きな副次的効果も生むことになる。

まず発音の上達である。中国語の学習を紹介するに当たって、発音が難しい、発音が大事だということさらに強調する向きもあるけれども、例えばclick音（吸着音、舌打音）のように模倣の困難さの突出した発音があるわけでもないし、母語話者に近い発音を目指すというのなら、いかなる外国語についても難しいことには変わりはない。これでは根拠希薄である。

強いて言えば、400余りの単音節が声調を伴って単独もしくは組み合わせによって語を成し、さらには文を作るその特異性に伴う難しさをそのような表現で訴えているのならば十分に理解することができる。「話す・聞く」で区別にてこずるのは避けられない。まずはそれぞれの音節の区別をそれなりの出来で発音できることこそが求められるのであって、それにはこの漢字の読みを一定期間や力技的に入力し続けることの効果は大きいだろう。

また、基礎語彙たる単音節語においては熟語ではなくてコロケーションを

挙げ、形態素ならばその造語力を並べて示してある熟語で値踏みすることができよう。ついでながら、日中での漢字の異同は自ずと身につくことも期待できる。⁸

9. おわりに

一昔前ならば紙の辞典を携えて中国語のクラスに臨むのが一般的であったものが、徐々に電子辞書に置き換わり、そしていつの間にかスマートフォンで済ますという風潮が広がった。この間に失ったものとそれを取り戻すための拙案は前述した通りである。

では、このコンテンツを普及させたいとなると、ネット環境での無料の配付という手法を選ぶのが順当である。特別な費用や労力を要することなく達成できるからである。しかし、それでは元の木阿弥なのである。すなわち、ネットで配付されて、そのままならばスマートフォンと同じであるし、普通に印字して「紙」の冊子にしたところで扱いやすい手軽なサイズの携行したくなる小冊子には程遠い。まさに逆説的な展開となる。本稿の志向するところではない。コンテンツに凝らした工夫も皮膚感覚に包まれてこそ活かすことを期待できよう。

文献目録

- 傅兴岭・陈章焕（1982）《常用构词字典》中国人民大学出版社。
北浦藤郎・蘇英哲・鄭正浩（1991）『50音引き基礎中国語辞典』講談社。
倉石武四郎（1952）『漢字の運命』岩波書店。
倉石武四郎（1958）『ローマ字初級中国語』岩波書店。
倉石武四郎（1969）『ローマ字中国語語法』岩波書店。
倉石武四郎（1963）『岩波中国語辞典』岩波書店。
中山時子・戸村静子（1982）『中国語発音字典』すずき出版。
中山時子・戸村静子（2001）『中国語発音字典 新装版』東方書店。
尚永清（1992）『中日辞典』小学館。
武信彰（2011）「電子辞書単用について考える」（単著）、『マテシス・ユニヴェルサリス』第12巻第2号、235-244頁。
武信彰・山田眞一（2013）『プログレッシブ中国語辞典 第2版』小学館。

8 あくまでも雛型であり、流れと効果に注目されたい。

藤堂明保 (1965) 『漢字語源辞典』 学燈社。

T'ung, Ping-cheng and Baker, Hugh D.R. (1993) *CHINESE IN THREE MONTHS*. Hugo's
Language Books Limited.

上野恵司・相原茂 (1993) 『逆引き中国語辞典』 日外アソシエーツ。

遊佐昇 (1984) 『中国語発音字典・電碼本—中国語をしらない人も使える—』 燎原。